二、學科並ニ學科目ノ增設廢止及統合ニ關スル件
研究中
三、毎週教授時數並ニ休業日ニ關スル件
研究中
四、修練ニ關スル件
本校ニ於テハ曩古未曾有ノ時局ニ際シ大東亞文化ノ指導者タルベキ奉公ノ至誠ニ徹スル資質ノ育成ニ努力シ來リタルガ今般示サレタル體育訓練實施要項ニ則リ全校協力一致、一層心身ノ錬成ニ邁進スルコトヽセリ
一、四大節奉祝式、大詔奉戴日、勤勞作業、防空訓練、文化講義等ヲ特ニ修練日ト定メ專ラ國家思想ノ涵養ト國民士氣ノ昂揚ニ努メツヽアリ
一、體操ハ綜合體錬トシテ教練教官指導ノ下ニ職員生徒全般ニ課シ又生徒ノ體質ト適性ニ應シ劍道、柔道、銃劍道、弓道、射擊、馬事訓練等ヲ演錬セシメ以テ質實剛健眞摯敢鬪ノ精神ヲ養フト共ニ身體ヲ練磨シテ體力ノ增進ニ努メツヽアリ
五、研究科聽講生ニ關スル件
五月二十日現在研究科ニ在學中ノモノ四十一名ニシテ其中日本畫科四名油畫科二名彫刻科塑造部十二名同木彫部十名工藝科彫金部三名同鍛金部三名同鑄金部六名同漆工部一名ナリ
聽講生ハ二名ニシテ何レモ油畫實技ヲ聽講ス
六、設備ニ關スル件
一、本校主要校舍ハ木造美術部本館　延一、六〇〇坪餘　工藝部本館延八三三坪餘　ノ二棟ナルガ何レモ建築以來三十五年ニ垂ントシ且ツ刻下防空對策上不安ト困難ニ直面シ居ルヲ以テ戰後可及的速ニ耐火建築ニ改築スル必要アリ　今ヨリ改築計畫ニ上案セラレンコトヲ望ム
二、雨天體操場、講堂ノ新營及体操場擴張ノ爲既存建築物ノ移轉ヲ昨年度豫算ニ要求シ置キタルカ体育及訓育上速ニ充足スルヲ緊要ナリトス
三、陳列館及倉庫ノ新營　本校多年蒐藏セル參考美術品ヲ有效ニ利用スル爲メ及ビ安全ニ保存スル爲必要不可缺ノモノニシテ、殊ニ目下防空防火ノ點ヨリ見テ現在ノ設備ハ不完全タルヲ免レズ殊ニ倉庫ノ新營ハ喫緊ノ急務ニ屬ス

⑫ 教科書

戰時中本校で使用された教科書を「自昭和十六年八月文部省往復書類教務課」より抜粋する。

学科目	教授担任者官職氏名	科学年	図書名	著編者	発行所	発行年月日	定価
英語	教授 森田亀之助	本科一年	Helps to High Living	Philodikaios	大洞書房	昭和十年四月二十五日	〇・九〇

同	講師 村田良策	予科	Adventures in Mongolia	H. Haslund	北星堂	昭和十一年一月二十九日	○・九○
同	同	師範科一年	同	同	同	同	○・九○
同	同	同二年	同	同	同	同	○・九○
仏語	講師 新規矩男	予科	フランス語初程	増田俊雄	白水社	昭和十三年六月二十五日	○・八○
同	同	本科一年	新編初等仏語読本	同	外語学院出版部	昭和十年三月十日	○・八○
同	同	本科二年	現代フランス語読本	河盛好蔵	白水社	昭和十四年二月二十五日	○・八五
国語	講師 遠藤佐市郎	師範科一年	万葉集要選	松田武夫	白帝社	昭和十六年二月五日	○・四○
同	同	同二年	古事記新抄	次田潤	明治書院	昭和十五年十二月二十日	一・○○
漢文	講師 秦慧玉	同一年	大学中庸章句	滝田亀太郎	金港堂	昭和九年十二月十五日	○・七○
同	同	同二年	荘子内篇	田中慶太郎	文求堂	昭和十五年三月二十日	○・四○

これらは昭和十八年六月十六日文部大臣の認可を受けて同年度に使用されたもの。この外に教科用図書として次の図書が同年度に使用された。昭和十七、十九、二十年度においてもほぼ同様の図書が使用されたようである。

教科目	図書名	著者名	発行所	定価	使用学科及学年
工芸化学	金属材料学	西川孝次郎	東洋図書株式会社	四・○○	工芸科一年
同	工業分析化学実験 上下	平野四蔵	共立社	上一・三○ 下二・○○	同二年
教育史	教育史綱要	吉田熊次	目黒書店	二・○○	師範科一年

論理学	論理学綱要	須藤 新吉	内田老鶴圃	二・〇〇	同一年

⑬ 仮卒業、仮修了

同年十一月二十四日、学徒出陣（同年十二月）のため三学年生徒に仮卒業証を、二学年以下の生徒には仮修了証を授与した。

⑭ 学徒出陣

戦況緊迫化に伴って政府は昭和十八年九月、学生生徒の徴兵猶予の停止を決定し、次いで十月二日、勅令を以て「在学徴集延期臨時特例」を公布し、徴兵猶予措置を廃止した。そのため、満二十歳に達した者は一勢に徴兵検査を施行され、同月十二日に閣議決定された「教育ニ関スル戦時非常措置方策」に基づいて理工科系および教員養成諸学校の学生を除く一般学生は兵役につくことになった。同年十二月一日には第一回学徒出陣が実施され、学生、生徒たちは一斉に入営（陸軍）、入団（海軍）し、また、それに先き立って十月二十一日、明治神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会が行われた。本校も例外ではなく、「各科生徒級別現員表」（910頁）に明らかなように、これより登校者数は激減し、また、登校者たちも長期の勤労動員に従わざるを得なかったため、美術学校としての機能は麻痺した。

次に掲げるのは㈠草野睿三氏（油画科）からの聞き書きと㈡中野將氏（彫刻科）の文である。出征の際も本校生の間には独特のやり方があったようだ。

経緯工芸同人出陣壮行会記念（吉田丈夫氏提供）
前列左より丸山不忘、高村豊周、染川鐵之助、田澤清美、河内三郎、篠井欽司
後列左より吉田丈夫、田中芳郎、渡辺守治、伊藤豊、辻光典

中塩喜六入隊記念（中野將氏提供）
前列（坐位）右より原国政哲、手島修、中塩喜六、永田大石、松田博
後列右より中野將（腕章は「東京美術学校報国隊中隊員」）、阿井正典、石塚清明、安田光男、岩田健、小川智

㈠昭和十八年九月、上級生（四年生）が繰上卒業したため、我々三年生は最上級生となった。その十二月に第一次学徒出陣があったが、我々十五年入学組は十二月〔正式には十一月二十四日〕に仮卒業となり、軍隊へ行っている最中の十九年九月に自動的に卒業となった。我々だけが卒業制作もせず、追い出されるように卒業させられたのである。

満二十歳以上が動員されるということは新聞で知り、それまでは何も知らされなかった。美校は浪人が多いので、予科生も半